

The Colors of Taipei (Taiwan)

MITSUBOSHI Muneo

Keywords: color, Asia Color Association, Taipei, Taiwan, vending machine, landscape

Abstract

The colors of plants and some public colors in Taipei were surveyed during the Conference of the 2nd Asia Color Association. Pine trees and common garcinia, “Fukugi”, and chinese banyan, “Gajumaru”, that can commonly be found in Okinawa were found. Such plants reminded the author that they have strong effect to form the image of the area.

Vending machines were rather hard to find outside. Several machines were found, many of which were white, and no bare red one was placed, which is contrasted with in Japan.

The author considers vivid colors in different hues of vending machines as potential public color pollution in Japan, and has proposed several solutions. It is discussed in the present report that the color and the shape of machines should somehow be standardized with a model of mail boxes outside.

台北（台湾）の色彩

三星宗雄

キーワード：色、色彩、アジア色彩学会、台北、台湾、自販機、景観

はじめに

2014年9月4日～7日まで、台北市・中国文化大学にて第2回アジア色彩学会が開催された。テーマは「都市生活の色 Urban Color For Life」であった。その発表分野の1つが「色彩と環境 Color & Environment」であり、最初の発表セッションが割り当てられていた。色彩と環境または環境色彩という分野は色彩研究の中では1つの確固たる分野を占めている。ちなみに昨年タイで開かれた第1回大会では、「色彩デザイン (Color design)」という大きなテーマの下に、「色彩環境 Color environment」として位置づけられている。

この環境色彩と色彩環境という用語には意味的に微妙な違いがあり、前者は環境に力点があり、いわば「環境の中の色彩」である。後者は色彩に力点があり、いわば「色彩による環境」、または「色彩をめぐる環境（色材、発色メディアまたは色彩教育なども含む）」と言えるであろうか。本論文は前者のスキーマである。

環境色彩をめぐる問題点の1つは、方法論が確立されていないことで

ある。台北で開催された大会で、筆者の前後に発表した台湾の研究者でも、事例研究（主に写真による）やある特定の場面（シーン）を切り取り、その中の色の特性（色相など三属性）を機械で測定するという方法であった。前者はいうまでもなく、後者であっても、果たしてそれによって視野全体の色のイメージを的確に記述することが可能かどうか、筆者には自信がない。余談になるが、発表会場で発表者と上のようなやり取りをしていたら、双方の英語の無理解もあって、座長の指示で会場から追い出されるという一幕があった。視野全体の色のイメージを、ちょうど騒音計のデシベル値のように、何らかの方法によって数値化できないものであろうか。常にそのような思いを持ちつつ環境の中の色彩を探すのである。

1. 植栽および自然景観

台湾は亜熱帯に属する島嶼で、3000 m を超える高山が144 峰を数える高山島である。最高峰は3952 m の玉山である。台北市の市花はツツジ、市木はガジュマルである。さすがにツツジやガジュマルはいたるところに見られた。図1の手前の木はおそらくガジュマルであろう。また図12の電話ボックスの背後にある木は間違いなくガジュマルである。ツツジやガジュマルは中国福建省や沖縄とのつながりを感じさせる（三星、2010）。また沖縄で防風林として良く目にするフクギ（三星、2008；2014）も見られた。

図1の写真を見ると、左奥にマツの木が見える。沖縄にもマツの木があり（リュウキュウマツ）、またもちろん日本本土にも遍在している。マツの木は景観のイメージの上で、日本本土との強いつながりを感じさせる。その地域の植栽は予想以上に地域の景観に強い影響をもたらす

（三星、2010a；b）。

サクラの木ももちろん見られた。台湾におけるサクラ（台湾桜）は沖縄のサクラ（寒緋桜）に似て、濃いピンク色であるが、それは実はわが国が一時統治していた時に植えられたものであると、台湾の研究者から教えていただいた。マツの木はどのようなだろうか。

図 27 や 28 にあるような、高いシュロの木が登場すると、さすがに亜熱帯のイメージが掻き立てられる（国立台湾大学）。



図1 植栽景観（大学宿舍付近にて）

2. 自動販売機

2.1 実態

今回の発表が「風景の中の自販機-日本における潜在的な騒色公害-」というものであったので、やはり自販機を探し求めた。わが国では自販機が視野に入らない空間を、少なくとも都市では、探すのが難しいほど溢れている（わが国にはすべての種類を入れると約 550 万台あると言われる。鷺巣、2003）。自販機の発祥の地である米国では、少なくとも屋外ではほとんど見つからない。台北市もほとんど見られない。本紙には

やっとたどり着いた自販機の画像をほぼすべて紹介した。それほど珍しいのである。

図2~4は松山空港内の自販機である。赤と黒の組合せによるかなりインパクトのある色彩である。しかし全体として黒でまとめられており(図3,4,7)、すっきりとした印象を受ける。わが国で一般的に見られる全面赤の自販機は非常に少ない。同じメーカーの自販機であるにもかかわらず、日台でかくも異なるのは、いったいどうした訳であろうか。

図5~10は中正紀念堂敷地内で見られた自販機である。赤や黄などの色も見られるが、全体としては白が多かった。また建物内にあったり、地下道にあったり、あまり目立たない配慮がなされている。図11は国立台湾大学構内の自販機である。やはり白である。ただ複数の自販機の間スペースがあったり、高さや幅が異なっていたりして、置かれ方がややもすると無造作な印象を受ける。

国立台湾大学の心理学系(学科)が入っている建物内にも自販機が見られた。やはり色は白であった。こうしてみると台北(台湾)では自販機は屋外ではなく、屋内に設置する文化のように思われる。

2.2 標準化の試み

筆者はこれまで屋外にある主として飲料水の自販機の色彩に関して、



図2 松山空港内にて



図3 同



図4 同



図5 中正紀念堂敷地内



図6 同



図7 同



図8 同



図9 同



図10 同



図11 国立台湾大学構内



図12 公衆電話ボックス（国立台湾大学近く）

その解決策を提案してきた（三星、2011；2014a; Mitsubishi, 2014）。それらを下に記す。

(1) 2台以上並べる（単独はいけない）。単独の自販機は周囲の景観または風景と切り離され、文脈を共有しない。

(2) 屋根や箱で覆い、自販機の形体の露出を最小限にする。屋根等は周囲の景観との連続性を強める。

(3) 屋根や箱で覆い、赤などの原色の露出を最小限にする。原色が自販機正面だけにしか露出しないようにする。

(4) そもそも原色の使用を避け、飽和度の低い色彩にする。黒や白は飽和度ゼロの究極の色彩である。

(5) デザインを周囲のデザインに合わせる（例 蔵の街倉敷に見る「蔵模様」のデザインが施された自販機）。

(6) ユーモアのある自販機

最近自販機については災害対応型自販機あるいはさらに次世代自販機の導入が進められている。2011年3月11日の東日本大震災で、日本コカコーラは首都圏設置のバッテリー内蔵型の災害対応型自販機約400台を遠隔稼働させ、帰宅困難者などに88,000本以上の飲料水を無料提供した（読売新聞、2013年8月21日夕）。サントリーも内蔵バッテリーによって飲料水を無料で提供する機能を持つ自販機を2010年末の約4,200台から2013年6月末で約1万台に倍増させた（同）。

また次世代自販機と呼ばれる、大型液晶タッチパネルディスプレイ方式の自販機は、現在JR東日本管内の駅などに約500台設置されている（読売新聞、2014年6月7日夕）。次世代自販機の最大の特徴は、複数の飲料メーカーの主力商品を1つの自販機に並べる「ブランドミックス方式」を採用していることである（同）。また画面に1日の天気や気温を含めた観光情報を表示するという。

自販機の持つ積極的な機能として、上に紹介した災害対応だけでなく、日常的な健康維持、たとえば熱中症予防、などを挙げることができよう。さらに夜間中点灯されていることによるある種の犯罪防止に役立っている面もある。ただし後者は電力消費という点ではそれ以上に大きな負の機能にもつながる。災害対応型および次世代自販機では省エネが不可欠になっている。

そうした積極的な機能を考えると、またメーカー側にとっても、自販機はある程度目立つことが必要なのではあるまいか。上に挙げた解決策の中の「表面の飽和度を下げる」と言っても、極端に低い値である必要はないであろう（屋内の白黒自販機は別である）。

そうした周囲の景観から孤立せず、しかし同時に景観に完全には埋もれない、という条件を満たすモデルとして、郵便ポストがモデルになるのではないかとと思われる。筆者には、屋外郵便ポストはやや小ぶりではあるが、統一された形状と「やや目立つ」色彩で、地域のランドマークの役割も果たしているように思われるのである。共通点として、何と言っても景観の中に独立に、あるいは「無理やり」組み込まれた工作物で、しかも両者とも道路沿線に多く見られることである。

実際には、現在の郵便ポストは種類が数10種類におよび、またその色彩も「やや目立つ」赤だけでなく、青や黄色のものもあるのが実情である（郵政博物館資料より）。その中には景観に対する配慮から青色とした例もあるようである（同）。すなわち郵便ポストも自販機と同じ問題を抱えていることが推定される。

自販機との相違点も多い。自販機は郵便ポストよりはるかに数が多く（郵便ポストの数は全国で約19万台とされている。郵政博物館資料より）、またより大型である上、照明装置や購買者との「マン・マシンシステム」も備えている。

郵便ポストは実際にはさまざまな形状および色彩のものがあるが、それらは特殊な例外とみなせば、概して統一感を感じられる。しかも小型であるためか、それほど景観の中で目障りにならない。

それにならえば、自販機も形状や色彩をできるだけ統一することが考えられよう。形状はともかく、現在の自販機の色彩はメーカーによってさまざまである。当然その色彩はメーカーの企業色（CC）なので、簡

単には変えられないことは容易に想像できる。各メーカー合同の次世代自販機はその解決につながっている。

そうすると上に述べた、屋根をいただいたり、箱の中におさまるといふ解決策は、むしろ形状の統一をこわすことにつながる可能性もあるが、一方全ての自販機に屋根をつけるという方法もある。あの独特の屋根が見えたら、そこに自販機があるという目印にもなる。

一方ある程度統一された色彩の自販機を通して、市中を走る統一された色彩の公共輸送機関（バス、タクシー）や、後述の釜山（韓国）や那覇のように建築物の一部の色彩を共通のものとすることによって醸し出される街の色彩の統一感に似た効果が得られる可能性もある。

郵便ポストは郵便局の前に設置されているだけでなく、しばしばコンビニエンスストアとも結びついている。自販機は当然競合相手であるコンビニエンスストアと結びつくことはあり得ない。しかし何か他の事物と結びつくことはできないものであろうか。上の「独特の屋根」と同じように、自販機の姿は見えなくとも、そこに自販機があることが分かるという構図である。そうすると自販機自体の色彩は思い切り目立たない色彩でも構わないのである。全国に約380万基（車両用300万基、歩行者用80万基）あると言われる（財団法人機械システム振興協会、2003）交通信号機はどうであろうか。

3. 公衆電話ボックス

台湾においてもわが国と同様、携帯やスマホが普及し、公衆電話ボックスの数は少なかった。図4の空港内のものはさておき、2台の自販機に挟まれている公衆電話ボックスがどうやら原型のようである（図5）。赤と黒（灰）を基調としているが、線状のデザインのためかそれほど際

立って目立つ配色ではない（図12）。赤と黒（灰）の配色は図2、3および4の自販機の配色を思い起こさせる。

4. 看板等

図13～15は台北市中心部の看板である。さすがに中国風で、わが国ではあまり見られない配色である。わがYoshinoyaも、黒とオレンジ色の配色で見られる（図13）。マクドナルドの看板に関しては1点を除いては、通常のものとは変わりがなかった。その1点とは青色が用いられている点であった（図16）。青色が食に関係する店の看板に用いられることは珍しい。わが国では、こだわりを売りにするラーメン店またはそば屋に黒や、せいぜい紺色が用いられているぐらいで、図16のような



図13 看板（台北中心部）



図14 同



図15 同



図16 マック店（夜）



図17 ファミリーマート店（国立台湾大学内）

鮮やかな青はあまりない。

図 17 は国立台湾大学構内のファミリーマートである。大きな大学の割にはこじんまりとしたコンビニであった。看板はわが国で見慣れた色彩ではなく、また小さく、近づいて良く見ないと気付かないほどである。図 11 の自販機と同様に、大学の雰囲気と調和するように配慮されていると考えざるを得ない。

5. トイレマーク

筆者が訪れた欧米や中国、タイ、およびマレーシア（三星、2014b）では、トイレマークは男女で色が変わらない（図 18、19）。しかし韓国では異なっていた（図 20）。台湾はどうであろうか。台湾は異なっているようだ（図 21）。図 21 では女性の赤が光線の関係ではっきりしないが、松山空港の表示では明らかに区別されていた。また国立台湾大学の図書館においても区別されている。この国による違いがどこから来るのか、面白いテーマではあるが、残念ながら今は明らかにすることができない。

ただすべてが男女別であるかというところではない。図 22 は市内で見つけたトイレマークである。デザインの面白さもさることながら、男女とも灰色で統一されていた。ここにも色彩のグローバリゼーションの波が押し寄せているようである。



図 18 トイレマーク（クアラルンプール）



図 19 トイレマーク（中国・長沙）



図 20 トイレマーク（韓国・釜山）



図 21 トイレマーク（女性用の赤が光線
の関係ではっきりしない。台北・淡水）



図 22 トイレマーク（台北市内デパート）

6. 公共輸送機関

図 23 および図 24 は台北市のタクシーおよびバスである。タクシーはイエローキャブで統一されていた。韓国釜山のホテルから眺めると、街のある地区はうすい青色が点在しているのが目に入る（図 25 三星、2010；2014a）。それによってその地区の色彩イメージが十分に統一されている印象を受ける。地区の色彩を統一するのに、すべての家屋や建築物の色が同一である必要はないのである。点在で十分なのである。那覇



図 23 台北市内のタクシーとバス



図 24 台北市内のタクシー



図 25 釜山の街並み

の街もそのような印象がある。

それと同じように、街中を走り回る（瞬間的には点在する）タクシーの色が同じであると、やはり街の色彩の統一感が感じられる（三星、2014b）。

図 23 のタクシーの背後にバスが見られる。かなり激しいラッピングである。ここには載せていないが、市内で見たバスはどれも鮮やかな色彩でラップされている。東京都のラッピングバスは都の財政の赤字が解消されるまで（当時の石原都知事）、という期限付きで始まったが現在でも多くのラッピングバスが走っている。とすると台北市の財政も逼迫しているのであろうか。

公共の色彩という観点からは、筆者にはやはりラッピングバスは望ましくないように思われる。バスやタクシーなど、街中で常に目にする公共輸送機関の色彩は、まさしく「公共の色彩」であり、いわばその街を代表する、または象徴する色彩である。たとえば旅行などによってその街から一時的に離れ、その後戻った時、そうした公共輸送機関の色彩を目にして、「ほっとする」ことがある。その「ほっとする」という感じはある種のその街に対する意識的または無意識的な愛着に関係している重要なアメニティの要素である。その色彩がラップされたり、あるいはバラバラだったりするとその醸造が難しくなるように思われるのである。

図 26 は台北市の地下鉄劍潭 Jiantan 駅の出入り口である。やはりわが国では見られない赤と黄を多用した色彩である。しかし中の構内は無彩色を基調としたすっきりとした色彩でまとめられている。



図 26 地下鉄の出入り口（台北 劍潭 Jiantan 駅）

7. 国立台湾大学

最後に、帰りに立ち寄った国立台湾大学を紹介しよう。図 27 および 28 にその画像を示す。レンガ作りの堂々たる建築群である。残念ながらその時期は夏休みで、構内に学生の姿はなく、また建物の中にも入れなかった。高いシュロの木がそこが亜熱帯であることをいやおうなく感じさせる。途中で強烈なスコールがあった。



図 27 国立台湾大学（正門）



図 28 同（構内）

引用文献

- (財) 機械システム振興協会 (2003) 環境・省エネ型 LED 照明機器システムの総合的普及戦略に関する調査研究報告書、システム技術開発調査研究 15-R-17.
- 三星宗雄 (2008) 沖縄の色、神奈川大学人文学研究所報 41、123-132.
- 三星宗雄 (2010a) 中国福建沿岸部の色彩と景観、神奈川大学人文研究 169、1-23.
- 三星宗雄 (2010b) 韓国色彩事情、神奈川大学人文研究 171、1-22.
- 三星宗雄 (2011) 風景の中の自販機、神奈川大学人文研究 174、95-113.
- 三星宗雄 (2014a) 『色彩の快：その心理と倫理』、御茶の水書房.
- 三星宗雄 (2014b) 多民族国家マレーシアの色彩、神奈川大学人文学研究所報 52、59-76.
- Mitsuboshi M. (2014) Vending machines in a landscape: A potential public color pollution in Japan. The Proceedings of the 2nd Conference of Asia Color Association in Taipei, 22-25.
- 読売新聞 2013 年 8 月 21 日夕記事.
- 読売新聞 2014 年 6 月 7 日夕記事.